

A Portrait of the Artist as a Young Man の鳥表象と芸術家像再考

— イェイツとシェリー作品とのつながり

岩下 いずみ

はじめに

A Portrait of the Artist as a Young Man (以下『肖像』と略す)において、主人公ステイーヴンが「鳥占い」を連想し、W・B・イェイツ著『キャスリーン伯爵夫人』のセリフを想起する場面に本発表はまず注目する。視覚で鳥をとらえメッセージを受け取るという鳥占い師の特徴は、視覚を介し対象を作品へ昇華する芸術家の手法に接続されたと捉えられる。『キャスリーン伯爵夫人』の詩人に示される予言と鳥占いとの関連において考察を進める際、視覚と芸術家に関する重要な示唆が見られるP・B・シェリー著「詩の擁護」もあわせて考察する。古代ローマ時代の鳥占いとモダニズムの芸術家を結びつける結節点として、シェリーとイェイツの作品の鳥表象・芸術家像を援用したい。こうした連関から、芸術家の飛翔を描いたとされる『肖像』を再検討し、ジョイスが示す芸術家像の新たな一面を解読することが本発表の目的である。

一 『肖像』における鳥占いと杖

『肖像』の結末近くでステイーヴンは国立図書館前で空に黒い鳥が飛び回っているのを目にする。この場面で彼が考える“a temple of air” (197)は古代ローマ時代、鳥占い師が杖を用いて空中に定め、その中で鳥の動き、数、鳴き声などをもとに占いをを行った空間を指す。この場面以降断続的にステイーヴンは鳥占いを連想する。美の司祭となることを決意するステイーヴンにとって、古代ローマ時代杖で空に神殿を仮想し、その中の鳥で様々な国事を占い、政治・宗教に関わる司祭だった鳥占い師は、時を超えて目指すべき存在だったと考えられる。ステイーヴンについては、デダラスという彼の姓とダイダロス神話との結びつきから鳥と飛翔に関する研究が多いが、本発表はそうした先行研究と異なった鳥占いを起点としての『肖像』研究を進める。

二 アグリッパの鳥占い

アグリッパはルネサンス哲学に魔術を持ち込んだ思想家であり「魔術師」である。ヨーロッパにおける魔術と自然哲学において、アグリッパはジョイスの時代にまで深い影響を残していた。ステイーヴン自身がアグリッパに言及し鳥占いの知識があることから、ジョイス自身が鳥占いの知識をアグリッパ、スヴェーデンボリの思想から得ていたのではないかと推測される。アグリッパとスヴェーデンボリはイェイツが傾倒したオカルト思想に深く関係する思想家でもあり、イェイツを評価していたダブリン時代のジョイスがイェイツを介してその思想に触れていた可能性は高い。既存の価値観に疑問を提起し対立しながら生きたアグリッパの姿には先駆者、ステイーヴンのような芸術家像と重なりがある。『肖像』でのアグリッパ言及からうかがえるのはイェイツからの影響、当時のダブリン知識人の思想の一端、異端者・先駆者表象などであろう。

三 『キャスリーン伯爵夫人』のアリアルに見られる詩人と予見

『キャスリーン伯爵夫人』は、貴族女性が大飢饉において農民を救うため、悪魔に自分の魂を売り亡くなるものの、天国に行くという五幕劇である。ツバメと鳥占いから、ステイーヴンは『キャスリーン伯爵夫人』におけるキャスリーン臨終場面のセリフを思い出す。『キャスリーン伯爵夫人』に登場する吟遊詩人アリアルは、鳥占い師に通ずる芸術家の不可思議な予見能力を示す。『キャスリーン伯爵夫人』はアイルランド文芸復興運動の主軸となるべきアイルランド国民劇場の初上演作品だったため、ステイーヴンが旅立ちを前にこの作品のセリフによって観劇の記憶を想起するのは、彼がアイルランド文芸復興運動から距離を置くために旅立ちを決意したからだとも受け取れる。ステイーヴンは自国と自国民に対する嫌悪で旅立ちを

決意するのではなく、アイルランド文芸復興運動家たちと距離を置きアイルランドを見つめ直し“the uncreated conscience of my race”(224)を見いだすために、ヨーロッパ大陸へと旅立つ。その重要な決意の前に『キャスリーン伯爵夫人』が引用されているのは意味深長といえる。

四 『キャスリーン伯爵夫人』とジョイス

『キャスリーン伯爵夫人』初演を観劇するスティーヴンはジョイスの体験の投影である。ジョイスは『キャスリーン伯爵夫人』初演版を高く評価し、上演反対活動への署名を拒んだが、これは作品自体を評価する芸術家としての宣言だった。ジョイスの『キャスリーン伯爵夫人』賞賛とスティーヴンの“jaded eyes”(199)には一見大きな隔たりがあるようだが、スティーヴンは観客や舞台装置、役者に「あきあきした眼」を向けており、彼の作品自体への評価は避けられている。ジョイスが『肖像』執筆期間中に『キャスリーン伯爵夫人』初演版翻訳を希望したが、イエイツが改訂版にしか許可を出さなかったという出来事が示すように、ジョイスは華美な舞台装置などを取り入れた改訂版ではなく、テキストそのものを重視して初演版を評価した。こうした姿勢がスティーヴンが舞台装置に向けるあきあきした眼に暗示されており、ジョイスは「先駆者」としてイエイツに一定の評価を与えながらも、芸術に関して互いの考えが離れていった一面が『肖像』に反映されている可能性は低くないだろう。想像力を介して自分の中から未知の美をつくり出すというスティーヴンが理想とする芸術家像は、イエイツが唱える美からの脱却を感じさせ、ジョイスはアイルランド文芸復興でのケルト神話の扱いに賛同できず、その視線をヨーロッパ大陸へと向け、ギリシア神話を元に『肖像』や『ユリシーズ』を構想する。

五 『肖像』と「詩の擁護」における「消えかけた炭火」—詩人と予見

シェリーも詩人が持つ予言者、統治者としての役割、社会への影響を考察していた。『肖像』においてもっとも強くシェリーとのつながりを示すのが、スティーヴンの美学論で「詩の擁護」から引用される“a fading coal”(187)である。「消えかけた炭火」が燃え上がるイメージは、スティーヴンが体験するエピファニーの瞬間と重なるもので、エピファニー体験を中心に繰り返す上昇と下降が下降・幻滅に帰するパターンは「消えかけた炭火」の重なる否定とも解釈でき、シェリーの美学論の否定とも取れる。一方、アイルランド文芸復興運動を進める上で、詩人が司祭、立法者であること、詩人の精神が「時代の精神」であると論じている「詩の擁護」は、イエイツにとってある意味では都合が良かったとも言える。

芸術家の多岐に及ぶ影響力、宗教と美学の緊密性がスティーヴンの美学論にも表れ「エピファニー」という宗教的含みを持つ美的瞬間の独自表現、芸術家も予測できないような美が生まれた。鳥表象は「消えかけた炭火」という予測を裏切る美的イメージと合わせて、芸術家の予見と想像力の関係という問題も提起している。海辺の少女のエピファニーには芸術家の予見を超えた想像力の結実がある。鳥占いを想起させるツバメを見つめる場面の後、スティーヴンは「消えかけた炭火」に予期せぬ風が吹いたのと同じく、未知の力が働き外界ではなく自身の内面からこそそれが生み出されたと感じている。ここには鳥占い師の時代からシェリー、イエイツを経てスティーヴンが見出しつつある美の理想像、芸術家としての新たな開花がある。

おわりに

スティーヴンが鳥占いに思いをはせる時、鳥占い師が活躍した古代ローマ時代、アグリッパのルネサンス、シェリーのロマン派時代、年上の同郷人イエイツと時代を通して点と点を結びながら、彼の追求する美と芸術家の理想像が彼の中で醸成される。スティーヴンはシェリーやイエイツに部分的には同意しその系譜を継承しながらも、独自の美学を形成しようとする中で、自分が芸術の新たな地平を切り拓く先駆者となることを自負する『肖像』の結末に向かう。

引用文献

Joyce, James. *A Portrait of the Artist as a Young Man: Authoritative Text, Backgrounds and Context, Criticism*. Edited by John Paul Riquelme, W. W. Norton, 2007.